編集委員長挨拶*

望月 修**

Invitation to Editorial Works

Osamu MOCHIZUKI

可視化情報学会は会員の皆様のご支援で 2006 年にめでたく創立 25 周年を迎えます。この間、学会誌は本会の顔、情報発信源、交流という役割で毎年 4 号ずつ発刊され、25 周年にあたる 2006 年の第 1 号 (1 月発刊) が通算で 100 号目となります。第 16 期 (2004 年度)、第 17 期 (2005 年度) の編集委員長を務めている間に、このような記念すべき号を発行できることは喜ばしいことです。それと同時に歴史の重さおよび責任の重さを認識させられ、身が引き締まる思いであります。ただし、100 という「きりの良い」数字だから特別というのではなく、我々編集委員にとってはどの号も重要で、毎号毎号に気を遣って取り組んでおります。ここで、編集委員会ではどのように毎号の出版を実現しているかの一端を紹介させて頂き、会員皆様のご理解とさらなるご協力をいただければ幸いです。

1 つの号を発刊するのに、ほぼ 1 年前に特集企画を行います。トレンドーでホットな話題を取り上げることに主眼がおかれることは当然ですが、過去に組んできた特集記事の中で重複や酷似したものは無いか、もしあるとすると異なる切り口で特集を組めるか、そのテーマでの特集を組める適切な人がいるか、などを検討します。編集委員の中で選ばれた担当委員は適切な執筆者の内諾を得るべく交渉を致します。数人の執筆者が決まると執筆依頼をし、原稿を 2 ヶ月以内であげて頂きます。原稿がそろった段階で本会誌のフォーマットにあうかどうかといった事務的処理を委員と著者とのやりとりによって行います。印刷所に原稿を提出した後、印刷前の校正を担当委員と著者がそれぞれ行います。全て OK になった段階で印刷発行となります。この間、編集委員会の幹事は、全ての号に関する発行までのプロセスにおいて特集記事はもちろんのこと、その他の記事に関してもいろいろと面倒を見ております。第 16、17 両期の幹事は東大の杉井康彦先生、染矢聡先生ですが、お二人の負担はものすごいものがあります。毎号無事に発行できているのはお二人のご尽力による賜物です。この紙面をお借りしてお二人に感謝の意を表します。

これまでの特集テーマを 10 年前の 1996 年 1 月の「脳機能をみる」(60 号) から、順に列記すると次のとおりです。なお、() 内の数字は号数です。表情を認識す

る (61)、GPS の基礎と応用 (62)、原子・元素の可視化 (63)、火山 (64)、色彩 (65)、情報のシンボル化 (66)、3D の世界 (67)、パソコン活用 (68)、模型表面流れを可視化で読む (69)、非破壊検査における可視化で読む (70)、衛星画像利用環境評価 (71)、人間の思考の可視化 (72)、開発最前線における可視化の利用 (73)、災害の予測 (74)、超音速・極超音速流れにおける可視化 (75)、マイクロビジュアライゼーション (76)、PIV (77)、数値シミュレーション情報の可視化 (78)、超音速燃焼—可視化と数値シミュレーション (79)、気液二層流における可視化 (80)、企業による可視化の利用 (81)、ウェーブレット解析の可視化への展開 (82)、感圧塗料技術の新展開 (83)、ゲノム解析における可視化情報 (84)、医療と可視化 (85)、地球環境情報の可視化 (86)、非ニュートン流体・粘弾性流体の可視化 (87)、地図と GIS (88)、高速度ビデオ／カメラ撮影の最前線 (89)、マイクロビジュアライゼーション (90)、流体機械の可視化 (91)、可視化と相似模型 (92)、スポーツ工学 (93)、脳の構造と機能の可視化 (94)、可視化情報最前線 (95)、ダイナミック PIV (96)、電子機器の開発・設計に関連した可視化 (97)、宇宙環境利用における可視化 (98)、情報の可視化 (99) です。これらは今でも決して古くなっていない内容で、テーマ設定の先見性があることに、これまで編集に携わってこられた方たちに敬意を表します。100 号以降においても、10 年、20 年たった後に、おもしろくまた決して内容が古くなっていないと評される内容となるよう、編集委員一同切磋琢磨していく所存であります。会員の皆様から是非こんな内容のテーマを取り上げてほしいといった要望をお寄せ頂けると幸いです。会誌の内容充実にご参加頂けるようお願い致します。

現在、学会誌の印刷費、発送費などに多額の費用がかさんでおり、この見直し作業を行っているところです。これらを抑えることには限界があるため、学会誌のあり方そのものも見直す必要が出てきております。情報発信、会員サービスといった学会誌のもつ役割を損なうことなく、新たな形態を探って行かねばなりません。100 号を期にこれから学会として何をを目指すのかを考え、それを達成するためにどのような編集があり得るのか、可視化情報をどのように伝えるのかといったことを皆様と共に考えていきたい、よろしくお願い致します。

* 原稿受付 2005 年 11 月 4 日

** 正会員 東洋大学工学部